

聖書の中で主イエスの誕生の場面を記しているのはマタイとルカであります。ルカは比較的詳しく記しており、人口調査があつて登録のためにヨセフとマリヤがベツレヘムに向かっていたことや宿屋には彼らのいる余地がなかったこと、誕生を真っ先に知らされたのが羊飼いたちであつたことを伝えております。この人口調査は当時イスラエルを属州化しておりましたローマ帝国の手によって行われました。目的は紛れもなく税金を課税するためでした。戸籍が整備されていなかった当時のこと、その方法は日本でいう本籍地へ行って行わねばならなかったのです。人々は全員仕事や生活に優先して旅に出て、必要な手続きを行わねばならなかったのです。抑圧に苦しむ人々の姿がよく描かれている場面です。

羊飼いは、当時の社会の中で最も身分の低いものとされておりました。彼らは人々から低いものと嫌われ、家もなく野宿しながら羊の群れの番をしていたのです。世の救い主と言われるイエスキリストの誕生を知るには最もふさわしくないように思える人々でした。しかし主なる神はその誕生を誰よりも先に知らされたのです。それは、彼らが一番、失望と悲しみの中にいたからであり、喜びと希望など訪れることはないと思つていたからです。自分が何故この世にいるのか分からなくなってしまうような人々に、イエスキリストは本当の友となり、生きる喜びを与え、慰めるためにこの世に来られた、これは事実なのだと言聖書は語っております。

私たちが先ほど礼拝で用いました大栄光の歌は、このとき羊飼達に現れた天使達が主なる神を讃美して歌つたものです。私たちは日曜日の聖餐式の度に、主の誕生が知らされた時の喜びの歌をそのまま用いて礼拝をしているのです。すなわちその喜びがその当時だけのものではない、ただ昔の出来事というだけでもない、今日の私たちにとつても大きな喜びであることをはっきりと示しております。

本日の旧約聖書は、いわゆる第三イザヤの言葉が選ばれておりました。イスラエルは国中に悪がはびこりその結果主なる神は悔い改めを促すために国を他国の手に渡して滅亡させてしまいました。人々は捕えられて滅ぼした国へと連れていかれてしまいます。民は国という大きなよりどころを失い、他国の苦しみにあつて初めて、自分達の上には主なる神がいつもおられ、関わっておられ

たこと、自分達が主なる神に対して大きな罪人であったことを悟ったのでした。そのような人達に対し、主なる神は人々に来たるべき希望を示されたのでした。そして民は、ペルシャの王キュロスから、条件付きとは言え、国の復興を許されることになったのです。第三イザヤは、捕囚から帰国した国の再建を指導する内容になっており、本日の旧約聖書の箇所は、その喜びを語っております。

しかしその後人間はどうなっていったのでしょうか。旧約聖書と旧約聖書続編は悲しい歴史を語っているのです。ユダヤの属州支配はその後、マケドニア、プトレマイオス、セレウコスと続き、セレウコス朝がユダヤ教禁止令を出したことへの反発が起き、マカベア戦争のもとに400年ぶりに独立を手にすることが出来ました。この時に誕生した王朝とハスモン王朝と呼んでいます。しかしこの王朝も長くは続かず、王位争いによる兄弟げんかがきっかけで、紀元前63年、ローマ帝国によって再び属州化されてしまいます。主なる神がイスラエルに対して関わりをずっと続けておられたのに、人間が無視して悪へと歩み、主なる神はそれに対し悔い改めを促し続けておられた、しかし人間の罪は深く、正しく歩むことは不可能であった。人間には正しく生きる指針が与えられねばならない、その登場を切に待ち望む。聖書はこのように語っております。人間が持っている自己中心の罪は深く根ざしており、もはや人間の力だけでは、一時の悔い改めでは効果は望めなかったのです。

さらに、悲劇の歴史はそれにとどまりません。ハスモン王朝時代、南部イドマヤ方面の将軍であったアンティパル1世の孫、後のヘロデ大王は、ローマの徴税官に任命された際、言うことを聞かない町は町ごと焼き払い、人々を奴隷として売り飛ばしていました。そして賄賂を使ってハスモン家をさせ、自分自身がユダヤの王になったのでした。ヘロデの残虐さは、ベツレヘム周辺にいた2歳以下の男の子を皆殺しにしたことからよくわかります。

主イエスはこのような私たちのところへ来られました。人間には出来ない力を世で示し、神の国を指し示し、命へ至る、すなわち正しい生き方を人間に示すためにこの世に来られたのでした。わたしたちは主によらなければ命の道へ至ることが出来ません。自分の罪の姿を考えますとき、それは明らかであります。わたしたちはそのことをよく覚えて、主のご降誕の喜びを新たにしたいものであります。